

## 超越項なき知覚

### 超越論的哲学における「形式-質料」の乗り越えとしての『知覚の現象学』

柳瀬 大輝

『知覚の現象学』は、私が十年前に自分に課した問い、思うに私の世代のあらゆる哲学者たちが自分に課した問いに答えようとするものです。その問いとは、実在論の素朴さに再び陥ることなく、いかにして観念論から抜け出すのかというものです（P1, 66）。『知覚の現象学』（1945）出版の翌年におこなわれたインタビューにおいて、メルロ＝ポンティは自らの問題関心を以上のように振り返っている。すなわち、彼にとっての哲学的課題は、カントの影響下で成立し、自発的総合作用によって経験を成立させる超越論的自我に定位するラシュリエ以来の「フランス反省哲学」を批判的に克服することであった。

こうしたカント的な超越論的観念論の乗り越えという企図に着目し、それとの近さと隔たりを論じつつ、前期メルロ＝ポンティ哲学の意義を測ろうとするのが、英語圏を中心とする近年の「超越論的解釈」である<sup>1</sup>。同解釈にはいくつかの論点があるが<sup>2</sup>、そのなかでも本稿が関わるのは、『知覚の現象学』において、直観と概念、感性と悟性という認識を構成するカントの二元論が乗り越えられ、経験を遂行する主体にとって最も先なるものである知覚は、それ自体としてつねにすでに意味を備えた仕方で与えられており（cf. Rockmore 2011, 187-208; Landes 2015）、超越論的統覚による総合とは異なる経験モデルが示されている（cf.

1 「超越論的解釈」は、それ以前の英語圏において大きな位置を占めていた経験科学との関係を重視する「心理学的解釈」に対して、メルロ＝ポンティを哲学として読み直す企図として提唱され（cf. Gardner 2015）、その前期哲学を『純粹理性批判』を中心とするカント哲学と比較検討することによって、超越論的観念論の独自の形態として理解する立場と規定される（cf. Berendzen 2023, 1）。ただし次の注で見ると、『純粹理性批判』をカントとの関わりから論じること自体は、その生前から見られる古典的な観点である。

2 まず、経験の可能性の条件を探求するカントに対して、そうした哲学的反省自体がそこから出発して可能になるような前反省的な知覚的世界が、「真に超越論的なもの」として設定されているという古典的論点がある。代表的論考としてGeraets（1971, 160-81）を、近年のものとしてMatherne（2019）をそれぞれ参照。ただし、すでに1947年に、アルキエも同様の指摘をおこなっている（cf. Alquié 2018, 195）。また、カントの超越論的観念論を物自体への接近を禁じる有限性の哲学と特徴づけた上で、メルロ＝ポンティにおける主体の身体性の強調とそれに基づけられた知覚的現出のパースペクティブ性を、カント哲学の徹底として理解する解釈もある（cf. Berendzen 2023）。

Somers-Hall 2019) という知覚の成立をめぐる論点である。

本稿がこの論点を扱うのは、経験構成におけるカント的二元論の克服が、『知覚の現象学』を「超越論的哲学」として読解する際の重要な特質を示すと思われるからである。対象の経験様式を問うという広い意味において、知覚経験の成立を問題にするメルロ＝ポンティの哲学は「超越論的」と呼ぶことができる。けれども、カントが経験の内容と区別されたその形式・可能性の条件を問題にしているのに対して、メルロ＝ポンティはそうした二項対立を採用することはない。最初期の研究計画から『知覚の現象学』（1945）を経て、同書の内容が要約的に開陳されるフランス哲学会講演『知覚の優位とその哲学的帰結』（1946）（以下『知覚の優位』）にいたるまで、メルロ＝ポンティは超越論的観念論の「形式 (forme)」と「質料 (matière)」という枠組みを批判し続ける。この点に着目することで示されるのは、メルロ＝ポンティが、直観－概念であれ多様－総合であれ、内容に対して離在する「形式」の付与による経験構成の理論を否定し、ゲシュタルト心理学に由来する「形態」概念を用いることによって、知覚経験それ自体の内在的組織化へと超越論的哲学を改鑄しているということである。

本稿は、まず前期メルロ＝ポンティ知覚論の当初の問題意識を確認し、それと関係する限りで、『純粹理性批判』の議論を概観する（第一節）。次に、そのカントへの批判の要点を、『知覚の現象学』を内在的に読解しつつ再構成する（第二節）。最後に、そうした批判を経て、知覚経験の成立に関する同書の積極的な主張の内実を明らかにする（第三節）。

## 1. 最初期メルロ＝ポンティの問題系とカントにおける総合の理論

1930年に教授資格試験に合格したメルロ＝ポンティは翌年からリセの教員を務めつつ、のちに『行動の構造』と『知覚の現象学』に結実する研究を進めるため、国立学術金庫への助成金申請の研究計画（「知覚の本性に関する研究計画」（1933））（以下「研究計画」）とその研究報告（「知覚の本性」（1934））を執筆した。

そこでの問題設定は「研究計画」冒頭において以下のように述べられている。まず、メルロ＝ポンティは当時支配的な知覚理論であった「批判主義的着想に由来する教説は、知覚を、非延長的与件（「感覚」）がそれによって最終的に一つ

の客観的宇宙を構成するように関係づけられ、説明される知的な操作として扱っている」(PPCP, 11) と、自らの批判対象を提示する<sup>3</sup>。ここで「批判主義」とは多様とその総合、質料と形式の区別から認識を説明する立場を意味している。すなわち、「知覚においては、まとまりのない質料と知性的形式とを区別することは不可能であり、「形態」<sup>4</sup>は感性的認識それ自体のうちに現前しているのであって、伝統的心理学によるまとまりのない「感覚」は根拠のない仮説であろう」(PPCP, 11-2) とメルロ＝ポンティは述べている。「形態」や「心理学」については第三節で扱うとして、ここでは批判主義の創始者であるカントにおける議論を概観していく<sup>5</sup>。

カントにおいて、形式－質料の対を踏まえた「形式性」への定位はその超越論的哲学の根幹をなす特質である。最初に語の意味を確認するならば、「質料」とは「規定されうるもの一般」を、「形式」とは「その規定」である(A266/B322)。すなわち未規定なものの規定によって経験の構成を説明していくというのが『純粋理性批判』の基本的な議論の方向とすることができる。そこではまず、認識は、対象からの触発によってその表象を受容する能力である感性とそれを概念によって規定する自発性の能力である悟性の協働によって成立するとされる。その際、認識の内容にかかわらず、対象の受容においてすでに時間－空間という人間的認識の枠組みが作動しており、それが「或るものがそのもとの直観される形式」とされる。同様に、人間的認識は因果や数のようなカテゴリーによって規定されており、こちらは「対象一般の思考の形式」(A50-1/B74-5)である。これらに対して、知覚のような経験的意識において、こうした純粋な形式によって規定される内容となるのが、対象による触発によって与えられる「現象の質料」としての「感覚」である(A20/B34)。感性の形式に先立つことから、感覚は時間－空間に先立つ対象の贈与として想定されている(cf. A166/B208)。こうした原初的な対象とのかかわりとして想定される多様な感覚を統一的に規定する形式の解明が、『純粋理性批判』前半の課題であるが、メルロ＝ポンティ研究を目的と

3 こうした「批判主義」の哲学者たちとして、具体的には、ラシュリエ、ラニョー、アランがあげられている(PPCP, 17-8)。

4 メルロ＝ポンティが肯定的に用いるゲシュタルト心理学由来の「形態」と批判の対象となる「形式」の原語(forme)は同一であるが、文脈に応じて訳し分ける。

5 形式－質料の枠組みによる『純粋理性批判』理解については、『知覚の現象学』に影響を与えたカッシーラー『シンボル形式の哲学』第三巻序論第一章「認識の質料と形式」にくわえ(ECW 13, 1-18)、ピピンの古典的な論考、とりわけその序論第二節を参照した(cf. Pippin 1982, 7-17)。

する本稿においては、カントの議論の詳細に立ち入ることはせず、メルロ＝ポンティの批判の主たる対象となる第二版演繹論に議論を絞る。

すでに述べたように、経験の原初的な質料としての感覚は、空間と時間という感性の形式によって規定される。このような主観の受容性の次元において成立するのが「感性的直観の多様」である。けれども、特定の時間・空間的位置において把握されるだけでは認識は成立しない。そこでは相互に関係づけられることなく、個別的現象が明滅を繰り返すだけとなるからである。例えば、経験概念に関して言えば、目の前をうごめいている多くのものは同じ「人」という概念のうちに取りまとめられ、純粋概念を例にとれば手元から落としたこととその落としたものが割れることには因果関係が認められなければならない。すなわち、今度は感性的直観の多様という質料が、概念という形式によって規定される「素材」となるのである（A76-7/B102）。

こうした多様の結合をおこなう主観の認識の枠組みとしての純粋悟性概念すなわちカテゴリーが対象と関係する仕方を論じるのが「超越論的演繹」である。『純粋理性批判』第二版において、カントはこうした純粋概念による多様の総合を超越論的統覚による統一作用によって基礎づけることになる。「私は考えるということが、あらゆる私の表象にとまなうことができるのでなければならない」（B131）という定式に示されるように、経験される表象は私によって思考されうることをその条件としている。というのも、さもなければ私は自分が考えることのできないものを表象しているという矛盾をおかすことになるからである。よって、「一つの意識において結合されうる」（B137）という統覚の統一性によって、直観の多様は最終的に総合されるのであって、統覚の総合的統一は「あらゆる悟性使用の最高原則」（B136）ということになるのである。

こうした統一作用は「判断」という様式によって説明される。カントは、「悟性は一般に判断する能力として考えられうる」（A69/B94）として、たとえば〈ペンギンは鳥である〉のように、或る表象を高次の表象に結合する「判断」の能力を「悟性」の内実としていた。演繹論第二版においては、「判断とは、与えられた諸認識を統覚の客観的統一へともたらず様式以外の何ものでもない」（B141）と語り直される。「AはBである」という判断における繫辞「である」は、表象の結合が「客観的に妥当する一つの関係」（B142）のうちにあることを示す。たとえば、「物体は重いものである」という述定は、それが「私にとってのみ重いと感じられる」ということを意味しているのではなく、主観の状態のいかんにかかわらず、物体

は「重い」と客観的に主張している。こうした判断は、物体という「実体」と重さという「偶有性」からなる「関係性」のカテゴリーに依拠するものである<sup>6</sup>。このようにカテゴリーは判断一般の規則となるものであり、感覚の多様を特定の「何か」へと総合的に統一する際も、同様の論理的規則が作動している。そして、こうした統一がなされる場は一つの意識としての統覚でしかありえない。以上から、客観的認識は、超越論的統覚の作用において、「感性的直観の多様」が「判断する論理的な機能」であるカテゴリーによって規定されることで成立するとされるのである。では、メルロ＝ポンティはカントのこうした議論のいかなる点を問題視しているのか、この点を次節で論じていく。

## 2. メルロ＝ポンティによるカント批判

『知覚の現象学』序論冒頭で、メルロ＝ポンティは「感覚」という概念を導入するならば、知覚それ自体を理解することは不可能になると主張する。彼はまず「感覚」を「私が触発される仕方、私自身の或る状態の体験」(PhP, 9)と規定する。これはカントにも見られる正統的な規定である(cf. A166/B207)。こうした感覚は、それを規定する形式に先立ってそれ自体で捉えられるならば、「私にとって何も意味せず」、「性格づけられたあらゆる内容の手前に」存する「未分化で瞬間的で点的な或る「衝撃」の体験」(PhP, 9)としてしか理解されえないはずのものである。哲学史的に見れば、こうした点的な感覚相互の連合によって人間的認識の成立を説明しようとしたのは、ロックに代表される「経験論」の哲学である。メルロ＝ポンティは、「経験論」において想定されるような物自体に直接的に由来する原子状の単純な諸要素が、経験を遂行する主体ぬきにそれ自体で結合していくことはありえないとしてその立場を退けた上で、「超越論的観念論」はそうした感覚要素の結合の説明として導入されたものであると主張する。すなわち、「主知主義は経験論への反論によって生きており、そこではしばしば、判断は諸感覚の散逸の可能性を打ち消すことを機能としている」(PhP, 40)。前節で見たように、カントにおいて、感覚は感性の形式にとっての質料であり、時間的－空間的規定を与えられた直観の多様が概念的規定にさらに質料を提供するのであるが、メルロ＝ポンティは感覚と直観の多様をほとんど区別せずに、未規定

6 こうした理解は、Höffe (1996, 95) による。

な素材としての感覚的なものが統覚すなわち超越論的主観による判断によって総合されるという簡略化した仕方で議論を進める。確かに、経験論とは異なり、カントにおいて感覚は物自体の直接的反映ではない。けれども、感覚的なものが多様なものとして与えられている限りにおいて、それは経験論における感覚の原子論的理解を引き継いでいるとみなされるのである<sup>7</sup>。

超越論的観念論が「知覚を可能にするために感覚に欠けているもの」として導入するのが「判断」（PhP, 40）である。それは質料としての感性的なものを形式のうちにまとめることによって、それ自体は意味をもたない内容に意味を付与することと理解される。メルロ＝ポンティはこの判断に関して重なり合う二つの視角から批判をくわえていく。第一に、知覚することが主観による判断すなわち思考に還元されてしまうこと、第二に、そのことによって、知覚的世界は論理的・客観的なものとして一様に規定され、知覚経験固有の成立契機が見逃されてしまうこと。これら二点を順に見ていくことにする。

まず、カントによれば、認識は論理的機能としての悟性的判断によって成立するとされていた。演繹論第二版において、家屋の形態についての知覚経験が量のカテゴリーを介した同種的な空間諸部分の総合的統一によって可能になっているという議論が展開されているように（cf. B162）、これは経験的意識としての知覚にも妥当する<sup>8</sup>。こうした判断は、感覚がそれ自体では意味規定を欠いた単純な印象であるならば、意味をもって現象が与えられるあらゆる場面に介入してくることになる<sup>9</sup>。そうだとすれば、結局のところ「知覚とは一つの判断」（PhP, 42）であり、「それゆえ、知覚とは [...] 知覚しているという思考である」（PhP, 47）ということになってしまうとメルロ＝ポンティは認定する。

7 「カントは [...] 一部の人が「原子」論と呼んできたもの——諸感覚内部や相互の間には複雑な統一はなく、諸感覚は「絶対的な単位」であるとする——を信じていたように思われる」（Pippin 1982, 29）とするピピンの立場はメルロ＝ポンティに近い。他方ロングネスは、知覚を単純かつ離散的な諸感覚の結合とする立場をカントに帰すことはできないとして、メルロ＝ポンティを批判している（cf. Longuenesse 1993, 307-9）。

8 『純粹理性批判』第二版における経験的意識へのカテゴリーの適用において重要な役割を果たしているのは、「判断」よりもむしろ「覚知の総合」であるが、メルロ＝ポンティは主観の自発性と経験の概念的・論理的構成という二つの側面を指すものとして「判断」という語を広くとっている。また、『プロレゴメナ』で提示される単に主観的妥当性しかもたない「知覚判断」は、それがやはり「思考する主観における諸知覚の論理的結合」を「必要とする」（Ak. IV, 298）点において、メルロ＝ポンティの批判の対象となるであろう。

9 「判断は、純粹感覚の存在しないあらゆるところに、つまりあらゆるところにあることになる」（PhP, 43）。

次に、こうした判断による未規定な諸感覚の規定的統一は、論理学をモデルにした「述定的次元の諸規定」(PhP, 41)である。すでに見たように、こうした述定は、その内容が検証によって論駁される可能性があるとしても、単なる私への現れを超えた特定の状況に関する客観的主張である。メルロ＝ポンティの見立てによれば、カント的な超越論的観念論による世界の最終的な描像は、原子状の単純な諸要素が論理的諸関係によって結合された客観的世界という自然科学的なものである。

[超越論的観念論によれば、] 自然的対象は、我々にとっての理念的統一、ラシュリエの有名な言葉にしたがえば、一般的諸特性の絡み合いにとどまっていた。科学の諸原理からすべての存在論的価値を取り去り、それらに方法的価値しか残さなかったとしても、思考可能な唯一の存在が科学の方法によって定義されつづけているがゆえに、こうした留保は、本質的には、その哲学を何も変えなかった。(PhP, 67)

カントにとって「超越論的」とは「対象にではなく、[...] 対象についての我々の認識様式に、一般にたずさわるすべての認識」(B25)、すなわち経験それ自体ではなく、「経験の可能性の条件」を探究する営みである。メルロ＝ポンティの見立てによれば、このことが意味しているのは、カントにおいては「もし世界が可能でなければならぬとすれば」(PhP, 39; PPCP, 50)ということがつねに暗黙のうちに仮定されているのであって、彼は経験についての或る先行的了解を前提した上で、そうした特定の経験に関する根拠づけを遂行しているということである。そしてその前提とは、ラシュリエが「一般的諸特性の絡み合い」と呼ぶような、個物を諸規定の「織り目」と捉え、それら概念的諸規定に即して分類される存在者相互の関係によって「世界全体」を描き出していくような自然科学的世界観である(cf. Lachelier 1990, 34-8)。超越論的観念論は、自然科学の根拠づけ、その「可能性の条件」の探求である限りにおいて、客観的認識の対象こそ「真の」世界であるという了解自体を問うことがなかった点において批判されているのである。

それに対して、私たちは原初的な経験においては、論理的・自然科学的な態度で対象と関係しているわけではない。或る概念のもとで同定され客観的に観察される以前に、対象は知覚において前述的な仕方、「何か或るもの」と

して現出してくる。客観的世界了解はこうした原初的な現出に対して二次的な観察や反省をくわえることによって初めて成立するものであり、知覚経験は反省に先行しているのである。これに関してメルロ＝ポンティは二つの想定反論を退けている。まず、知覚経験において「混濁した」仕方で与えられる世界は、観察や実験、反省による検証を通じて「客観的で精密な」世界の描像へと高められるのであり、「知覚とは始まりつつある科学のこと、科学とは方法的に秩序立った、完成された知覚のことだ」（PhP, 68）と言われうるかもしれない。けれども、これは事柄においてそして私たちにとって先なるもの（経験において両者は同一でしかありえない）を、事後的なものから説明するという倒錯をおかしているという理由から退けられる。次に、メルロ＝ポンティは超越論的水準における判断と経験的水準において主体が自覚的に遂行する判断を混同しているのであって、前者は「超越論的論理学」である限りにおいて、「一般論理学」に先行する概念の「前述定的」行使ではないかと言われうるかもしれない。実際、私たちは知覚において対象を量のような純粹概念や一般概念によって把握するけれども、そのつど意識的な内言をとまなう判断をしているわけではない。そうだとすれば、ここでの判断とは「我々において、我々ぬきに、我々に反してさえ」遂行されるマルブランシュの「自然的判断」（PhP, 52）のようなものであって、その判断の行使者が近世哲学における神から超越論的主観へと置き換えられているのだと、メルロ＝ポンティは認定する。主体の関与なしに現出が与えられるというこうした議論は、観念論のうちに見られる経験の事実性すなわち「知覚の不透明性」（PhP, 53）への忠実さとしてメルロ＝ポンティは高く評価するが、他方で彼は、17世紀の哲学者と超越論的観念論は等しく誤っていると主張する。誤謬は、原初的な知覚経験に内在的に付き従わず、それを、世界を創造する神や規定的に世界を構成する超越論的主観という超越項から説明する点にある。そうだとすれば、せつかく見出された知覚経験の独自性は、それに対して離在する特権的存在者によって根拠づけられることで失われる。これは、カントの超越論的観念論に立ち戻るならば、論理的なカテゴリーによる知覚経験の根拠づけを意味する。確かに、経験において判断は自覚的に遂行されていないけれども、それは知覚経験とは異なる「論理」を導入している限りにおいて、原初的な現出を二次的な反省によって説明するという自然科学的世界了解に関して述べたのと同様の倒錯をおかしている。そうだとすれば、「客観的諸関係の手前<sup>シンタククス</sup>にあつて、それ固有の規則にしたがって接続する知覚の統辞法」（PhP, 45-6）が探求されなければ

ばならない。メルロ＝ポンティは、カントが経験の「可能性の条件」の探求に留まったことによって客観的・述定的水準に先行する知覚経験を見落としたのに対して、自らは知覚経験に固有なその「現実性の条件」(PhP, 501)を探求すると主張するのであるが、この「現実性の条件」の解明こそ、前述定的な原初的経験<sup>10</sup>としての「知覚の統辞法」、命題の述定とは異なる知覚固有の「論理」に他ならない。この内実の解明が次節の課題である。

### 3. 知覚の「論理」としての形態

ここで1930年代の「知覚の本性」に立ち戻るならば、そこでメルロ＝ポンティは、批判主義の知覚理解に対して、「形式なき質料はなく、あるのはただ多少なりとも安定し、多少なりとも分節化された諸組織でしかない」(PPCP, 25)と主張している。念頭に置かれているのは、知覚経験における要素的な感覚与件に対する全体の先行性を主張するゲシュタルト理論の立場である。メルロ＝ポンティは同理論から借り受けた「形態」の概念を用いて批判哲学を「鋳直す」(PPCP, 13)ことを自らの課題として設定する。

20世紀初頭のドイツで誕生したゲシュタルト心理学は、単純な刺激と一対一対応する要素的感覚の連合によって知覚を説明するそれ以前の実験心理学に対する批判として登場した。経験論的な連合主義を採用する実験心理学においては、最も単純な感覚の測定とそれらの連合の法則の探求が主要な課題となっていた。けれども、知覚において点的な印象が実際に経験されるということはない。メルロ＝ポンティが、「我々が或る総体を事物として知覚しているからこそ、その後で分析的態度はそこに類似や隣接を識別できるのである」(PhP, 23)と述べるように、知覚経験において最初に与えられるのは皿やリングのようなまとまった「形態」である。このように、原初的知覚の所与は要素的感覚ではなく或る全体であり、かつこの全体は要素の総和とは根本的に異なるものであるとするのが、ゲシュタルト心理学の基本的な発想である<sup>11</sup>。こうした全体論的心理学が超越論的哲学の改鋳にかかわるのは、前節で見たように、批判主義の知覚理論は質料と

10 論理的・述定的次元に先行する「前述定的」次元という発想は『経験と判断』を中心とする後期フッサールから受け継がれたものである。この点については、Robert (2005, 137-141)を参照。

11 要素と全体という視角からゲシュタルト心理学の意義を論じるものとして、高橋(1974)を参照。

しての多様な感覚という想定を経験主義と共有しつつ、そこに総合の説明として主観的形式を導入することによって、「経験論」の機械論的連合を乗り越えるものとみなされるからである<sup>12</sup>。知覚が要素的な感覚与件に還元されうるのが事後的な反省においてでしかないとすれば、単純な感覚要素を、「類似や隣接」による連合、ひいては主観による総合によって全体的経験へと構築するという発想は、終着点として意味を備えた全体的経験が与えられていることを前提している。そうだとすれば、前経験的な感覚の連合から経験を説明する理論それ自体が、感覚与件の存在を独断的に想定している点において誤っていることになる。知覚がまずもって意味を備えているのであれば、知覚における質料と形式の分離という発想をとることは不可能である。

『知覚の優位』講演において、メルロ＝ポンティは、ゲシュタルト心理学から引き出される哲学的意義を次のように述べている。

したがって、我々は形式と質料という古典的な区分を知覚に適用することはできないし、知覚する主体を、意識がその理念的法則を所持しているような感性的質料を「解釈」したり、「解説」したり、「秩序」づけたりするような意識として理解することもできない。質料はその形式を「孕んでいる (prégnant)」のであって、結局のところ、あらゆる知覚は或る地平のうちで生じるのである […]。(PPCP, 41-2)

質料が形式を「孕んでいる」と言うときに、メルロ＝ポンティが念頭に置いているのは、『シンボル形式の哲学』第三巻におけるカッシーラーの議論である<sup>13</sup>。そこでカッシーラーは、カントにおける質料と形式を、分析のための方法論的区分としたうえで、実際の意識現象においては、「我々は […] 素材と形式からなる合成体しか知らず、 […] あるのはつねに全体的体験だけである」(ECW 13, 227) と述べる。そして、知覚における原初的現出の様式を「シンボリックプレグナンツ」と呼ぶ。それが意味するのは、曲がりくねる一本の線がそれとして見られつつ同時に一匹の蛇として現出してくるような、「そこにおいて或る知覚体験が

12 実際、フランス思想史の文脈においては、実験心理学の移入者であり、心的現象を単純な刺激の受容という生理現象に還元しようとするリボーの「実証主義的・唯物論的思想への対抗反応」(Nicolas 2002, 105) という側面を、精神の自発性を強調する反省哲学はもっていた。

13 身体や表現といった主題に着目して『知覚の現象学』へのカッシーラーの影響を包括的に論じるものとして、猪股(2018)を参照。

「感性的」体験でありながら同時に特定の非直観的「意味」を含み、この意味を直接的で具体的な提示へともたらず様式」(ECW 13, 231) のことである。メルロ＝ポンティは、カントへの批判を踏まえたこうした「内容と形式との絶対的同時性」を示す「プレグナンツ」の概念を、自らと「類似した目的」(PhP, 148) をもつとして高く評価する。メルロ＝ポンティは「形態」と「プレグナンツ」の概念を重ね合わせることによって、それを形式－質料図式を逃れる知覚の原初的贈与の様式であるとしているのである。

本節冒頭に引いた「知覚の本性」で、こうした原初的知覚においては「多少なりとも分節化された諸組織」があると語られていた。『知覚の現象学』で、こうした主観の自発性に「先住する土着の組織化 (organisation autochtone)」(PhP, 18)、「知覚の内的統辞法」は、ゲシュタルト心理学における形態の図－地構造によって詳述される。

地の上の図が、我々が得ることのできる最も単純な感性的所与であるということ、ゲシュタルト心理学が我々に語る時、[...] それは知覚現象の定義そのもの、それなしでは知覚が知覚と言われることのできないようなものである。知覚的な「何か」はつねに他の事物の只中にあるのであって、つねに一つの「領野 (champ)」の一部をなしている。(PhP, 10)

視野のすべてが同質であれば、そこには特定の識別可能な「何か」は現出しない。知覚において何かを与えられるのは、それが特定の形態として領野全体における他の領域から区別される場合である。視野はさまざまな形態によって分節化され、構造化されている。ここで、視覚の対象——例えば本——の形態は、それだけで与えられているのではなく、机や壁のようなその背景との関係において経験される。すなわち、形態という「図 (figure)」は必ずその背景となる「地 (fond)」をとめない、両者を包含する全体としての領野のうちで与えられるのである。実験心理学が実体的に存在する感覚印象として想定するようなわずかな光点であってもそれは暗闇を背景としなければ捉えられえない。かくして、端的な印象以上のものを「意味」と呼ぶのであれば、「基礎的な知覚はすでに意味を担っている」(PhP, 9) ののである。

こうした図－地関係には、図が特定の何かとして規定的に現出するのに対し、その地は未規定的なままとなるという特徴がある。私が机の上に置かれた本を

注視している限りにおいて、私はその机の上に他に何があるかを漠然としかとらえていないし、事後的な証言を求められた際に本の背後にあったものについて確言することはできない。さらに遠く、部屋の隅に何があったかはなおさら判然としない。地は「あったような気もするし、なかったような気もする」というような不分明な地帯にとどまる。先ほど引用した『知覚の優位』の言い回しを使えば、このように知覚の中心である図が規定的に現出し、周辺は未規定的なままにとどまるという「地平」的な仕方で、知覚の領野は構造化されているのである。

このような構造化は知覚の領野それ自体のうちに未規定性を保持するという点において、批判主義の知覚理解と大きく異なっている<sup>14</sup>。カントにおいては、未規定性は経験以前のその質料として感覚的なものの側に与えられ、規定性はそれに形式を与える主観の側に割り振られる。そしてそのように成立した認識は、前節で見たように、自然科学的世界了解到に合致するような客観的なものであるとされていた。こうした世界は法則にしたがって隔々まで規定されたものであって、世界のうちには未規定性の余地はない。

これに対して、メルロ＝ポンティにおいては、未規定性と規定性の関係は知覚の領野それ自体の地平構造のうちに置き直されている。この点は、特定の対象を現出させる注意という事例に即して、以下のように説明される。

かくして注意は、イメージの連合でも、すでに対象を支配している思考の自己への還帰でもなく、それまで単に未規定な地平としてのみ提供されていたものを顕在化し主題化するような、或る新たな対象の活動的構成なのである。  
(PhP, 39)

それまで注目していなかった何かが主題的に現出してくるという経験は、その対象にかかわる単純な要素の連合でも、そうした未規定な要素を思考という主体の自発性によって規定することでもない。それはむしろ、未規定的な周辺にとどまっていたものが中心にせりあがってくるという知覚領野の内在的運動によって説明されるのである。こうした図の変化は知覚全体の構造をも転換し、領野

14 この点についてはすでに Sommers-Hall (2019, 118-21) も指摘しており参考にしたが、ここでは「形式－質料」枠組みの克服という視点が抜けている。

の「一つの新たな分節化を […] 実現する」(PhP, 38)。そこには、経験に先行する感覚という所与やそうした所与を外部から規定する主観の形式といった経験を超越する枠組みを導入する必要はない。メルロ＝ポンティは、「形態」は世界の現出そのものであって、その可能性の条件ではない。それは一つの規範の誕生であって、一つの規範にしたがって実現されるものではない」(PhP, 74)と述べている。「形態」による知覚の構造化は、それ自体がまさに対象として現出してくるものなのであるから、現出者から離在する「現出の可能性の条件」ではない。また、経験に先行しそれに対して外的な意識が現出の法則を所有し、そうした規範に則して経験を構成するというものもない。領野の構造化は、図としての「形態」の現出それ自体と同時的だからである。何が図となるかによって、知覚領野全体すなわち「世界」は異なる仕方で統一される。このことをメルロ＝ポンティは、「[…] 意識の統一は「移行の総合」によって少しずつ構築されていく。意識の奇跡とは、現象が対象の統一を破壊するまさにその瞬間に、その統一を新たな次元において再興するような現象を、注意によって現出させるということなのである」(PhP, 39)と言いつつ述べている。

こうした事態は、具体的には、次のように記述されている。

私が砂浜の上を難破船の方へ歩いており、[その船の] 煙突や帆柱が砂丘を縁どる森と混ざり合っている場合、こうした細部が生き生きと船へと結びつき、それと一つになる瞬間が来るだろう。[…] 突如として光景は再組織化され、私の不明確な期待に満足を与えたのである。(PhP, 24)

砂浜のかたわらに広がる林という景色は、私が歩いていくなかで、或るとき突然、その様相を変える。林の中の枯木と溶け合っていたものが古びた煙突や帆柱として現出し、それに合わせて、その手前の砂山の一部に見えていたものは朽ち果てた難破船として知覚される。意識の総合は時間のうちで、知覚領野の規定的中心と未規定な周辺が動的に転換することによって、新たな仕方で展開されていく「移行の総合」として理解されるのである。そこには知覚の質料と形式の区別はなく、ゆえに形式を付与する超越論的主観もない。すなわち経験に対する外在的な超越項なしに、知覚はそれ自体に内在する「土着の意味」によって住まわれているのである。

## おわりに

本稿は、前期メルロ＝ポンティの知覚論をそのカント批判という視角から検討してきた。そこで示されたのは、メルロ＝ポンティは、論理的形式－感性的質料の離在を前提したカントの経験理解を批判し、両者の区分に先立つ「形態」概念を採用することで、超越論的哲学の改鑄を試みていたということである。形態の特徴をなす地平構造は、知覚の領野それ自体のうちに規定的に現出する対象とその周縁の未規定性を同時に含むものであり、カントにおいては相互に外在的であった規定的なものと未規定的なものという経験の構成契機は、知覚領野そのもののうちに置き移されているのである。なお、本稿が最後に提示した知覚領野の「移行」を可能にする時間性の内実については、稿を改めて論じることとしたい。

## 参考文献

### 略号を用いた文献

カント『純粹理性批判』の引用については慣例にのっとり、第1版をA、第2版をBで、また『プロレゴメナ』についてはアカデミー版全集の巻数（Ak. IV）で表記する。

Cassirer, Ernst,

ECW 13 : *Gesammelte Werke*, Bd. 13, B. Recki (Hrsg.), Meiner, 2002.

Merleau-Ponty, Maurice,

PhP : *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.

PPCP : *Le primat de la perception et ses conséquences philosophiques*, Verdier, 1996.

P1 : *Parcours, 1935-1951*, Verdier, 1997.

### その他の文献

Alquié, Ferdinand. 2018. « Une philosophie de l'ambiguïté », in *Solitude de la raison*, La Table Ronde.

Berendzen, Joseph C. 2023. *Embodied idealism*, OUP.

Gardner, Sebastian. 2015. "Merleau-Ponty's transcendental theory of perception," in *The transcendental turn*, S. Gardner and M. Grist (eds.), OUP, 294-323.

- Geraets, Theodre F. 1971. *Vers une nouvelle philosophie transcendantale*, Nijhoff.
- Höffe, Otfried. 1996. *Immanuel Kant*, 4. Aufl., Beck.
- Lachelier, Jules. 1990. *Cours de logique*, J-L. Dumas (éd.), Universitaires.
- Landes, Donald A. 2015. "Between Sensibility and Understanding," *The Journal of Speculative Philosophy*, vol. 29 (3), 335-45.
- Longuenesse, Béatrice. 1993. *Kant et le pouvoir de juger*, PUF.
- Matherne, Samantha. 2019. "Toward a new transcendental aesthetics," *British journal for the history of philosophy*, vol. 27 (2), 378-401.
- Nicolas, Serges. 2002. *Histoire de la psychologie française*, In Press.
- Pippin, Robert B. 1982. *Kant's Theory of Form*, Yale University Press.
- Robert, Franck. 2005. *Phénoménologie et ontologie*, L'Harmattan.
- Rockmore, Tom. 2011. *Kant and phenomenology*, The University of Chicago Press.
- Somers-Hall, Henry. 2019. "Merleau-Ponty's reading of Kant's transcendental idealism," *The southern journal of philosophy*, vol. 57 (1), 103-31.
- 猪股無限. 2018. 「神話的思考から身体へ」, 『文化交流研究』, 第 13 卷, 15-26.
- 高橋滯子. 1974. 「全体と要素」, 大山正編 『心理学の基礎』, 大日本図書, 135-63.